

目次

はじめに	6
1 建築学科50年史	9
工学部第一部建築学科の略史	10
1 建築学科の創生期：1962(昭和37)～1965(昭和40)年度	
2 完成年度以降の安定成長期：1966(昭和41)～1967(昭和42)年度	
3 学紛争の時代：1968(昭和43)～1972(昭和47)年度	
4 第二次安定成長期：1973(昭和48)～1990(平成2)年度	
5 バブル及びその崩壊期：1991(平成3)～1994(平成6)年度	
6 バブル終焉以降期：1995(平成7)～1999(平成11)年度	
7 再構築計画と改革の時期：2000(平成12)～2005(平成17)年度	
8 九段校舎に於ける人事交代の時代：2006(平成18)～2011(平成23)年度	
9 その後の建築学科・葛飾新キャンパスへ：2012(平成24)年度	
第一部建築学科総合年表	114
工学部第二部建築学科の略史	126
2 建築学科の各種変遷	137
人事構成の変遷	138
1 第一部 講師以上	138
2 第一部 助教 補手 事務	140
3 第二部 専任講師以上	142
4 第二部 講師 補手 助教 助手	144
建築学科施設の変遷	146
カリキュラムの変遷	158
1 第一部カリキュラムの変遷	
2 第二部カリキュラムの特徴	
補職等の変遷	
1 建築学科・建築学科専攻関係の主な補職	162
2 歴代学部長 名誉教授 理事 評議員	164
3 建築学科学生の記録	165
在籍学生数	166
第一部・第二部 工学研究科修士・博士課程 入学・卒業(修了)者数	166
建築学専攻・歴代博士学位取得者	168
第一・二部 成績最優秀賞・卒業制作(設計)最優秀賞 受賞者	170
進路状況	172
1 第一部建築学科の進路状況	172
2 大学院 進学・就職状況	173
3 第二部建築学科の進路状況の特徴	174
4 寄稿	175
元教員からのことば	176
卒業生からのことば	190
現在の研究室から	206
1 第一部建築学科	207
2 第二部建築学科	208
築理会のあゆみ	239
あとがき	246

はじめに

記念誌編集委員長 真鍋恒博

35年史から40年史へ

建築学科の発展の過程を記録に残しておこうという話は、1993(平成5)年に始まっている。この年5月の教室会議で、学科設立35周年を記念して建築学科の歴史をまとめる提案が出た。設立35年目は1997年3月だから、4年前から企画されていた訳である。通史部分については、井口教授がさまざまな資料を調べて書かれたのだが、寄稿部分の原稿がなかなか揃わないため企画は延び延びになり、やがて35周年には間に合わなくなった。何をもって35年目と数えるかという議論もあって、卒業生が出て初めて1年目だからまだ間に合うという珍説すら出た。一時は企画も立ち消えになるおそれもあったが、一人前の建築学科としては歴史記録ぐらいは纏めておくべきであり、既に原稿を書かれた人(何人かは既に鬼籍に入られていた)に対しても中止ではあまりに礼を失する。やはり出版すべきとの結論になった。

2002(平成14)年に当時の学科主任であった小生が後を引継いで、40年史として企画が再スタートした。創設期から在籍の井口・平野両教授が既に2000(平成12)年度からは非常勤になっておられたので、このタイミングを逸する訳にはいかなかった。

企画を再開したものの、やはり原稿の集まりは悪く、またもや何度か原稿最終締切を延長しながらも、何とか創設41年目の2003(平成15)年度の内に『東京理科大学工学部建築学科40年の記録』の刊行に至った。

しかしこの40年史は、ワープロ打ちをそのまま印刷して簡易製本したものであり、その前文でも、もっと切りの良い時期に(おそらく「50年史」として)更に内容豊富な公式記録が刊行されるべきとし、40年史をそのための準備段階の暫定版と位置付けている。さらに、保存された教室会議ファイル等の資料をじっくり読んで内容を補完することは定年後の楽しみに取っておく、などと予告めいたことまで書いた。そしてこのたび、まさにそれが現実になった訳である。

記録と記憶

今回の「50年史」は、40年史をベースにしつつも、さまざまな記録をあらためて参照・分析し、できるだけ正確な記録を残そうという目標で臨んだが、今ここで記録に留めておかなければ永久に忘れ去られてしまうとの切実な思いから、かなり微に入り細に細い内容になった。また建築学科だけに留まらず、それに関連する工学部や大学全体のさまざまな出来事にも、建築学科の歴史の背景として言及するこ

とになった。

こうした記録は単にデータを調べれば書けるというものでもない。最初の11年間を除けばまさに自分が体験してきた人生の大部分を占める時期であり、さまざまな事を実体験してきた。こうした事の記憶にはあやふやなものも少なくないが、数々の資料を解読する際に大いに役立った。以前のことをいろいろ調べているうちにあいまいな記憶が次第に明らかになって来て、走り書きのメモなども意味が解読できて事実関係を裏付けるものになる場合もある。いろいろな出来事やその理由・背景が知りたくなくて、それを調べればまた新たな疑問が生ずるなどするうちに、当初の予定を遥かに越える量になってしまった。もっとスリムにしようとも考えたが、やはり今の時点で分かったことはなるべく全部書いておいて、建築学科の歴史の基礎データとして記録に残す方針を取った。

対象とする範囲

記録の対象とする範囲は、時間軸では創設時の1962(昭和37)年度から2012(平成24)年度までの51年間である。ただし最終年度には小生は既に専任扱いの立場から退いて学内事情に疎い存在になっていたため、記述も簡単な内容になっている。

建築学科に関わる組織体としては、創設時は工学部建築学科、大学院設置後は工学研究科建築学専攻、さらに工学部第二部の設置後は第一部および第二部建築学科がある。この50年史では、工学部第二部建築学科については第一部や大学院に比べてかなり簡単な内容に留まっている。工学部第二部については、開設30周年記念誌『夜だからこそ学べる』(2006/平成18年6月刊)という、工学部第二部創設以来30年間の歴史をかなり詳細に記録した刊行物がある。それに収録された内容との重複を避けたので、ここでは比較的簡易な記述となったことをご理解いただきたい。最初は第一部から分れてスタートしたが、その後は夜間部ならではの特徴を活かして独自の発展を遂げている工学部第二部建築学科が、いずれ独自の50年史を纏ることを期待する次第である。

こうした記録を残すことは、過去に思いを馳せ過去を懐かしむのは無論のこととして、現在の建築学科がこうして存在することの背景に過去のさまざまな蓄積があることを、若い世代の人にも知っていただくための一助になることを期待している。無論、単に「へえ～、そんなことがあったのか」と言う興味だけからでもこの記録をお読みいただければ、望外の幸であることは言うまでもない。

